

人間にとつての「気持ちのいいこと」を伝え、想起させること——真砂秀朗さんの活動を端的にいうならこうなる。インドネシア・バリ島、西アフリカ、アメリカ南西部など、世界各地のネイティブカルチャーへの旅を重ね、そこで出会った楽器を演奏して独自の音楽を制作。同時に絵画や絵本などの制作を、湘南・葉山の地で続けている。

## 編集長のラピタを肴に酒場でトーク

【第2杯目】

今月のゲスト

葉山をバリ化して人生を楽しむ

アーティスト 真砂秀朗さん



昭和27年生まれ。今年3月には福岡万博・地産市民村のオーブリンコンサートに出演AWAアワードというインディーズレーベルをプロデュースしている。www.awa-muse.com

# 都会と田舎の境界線で見えてくる Premium&COOLな 日本人のアイデンティティ

大家 伝説になった海の家。オアシス」を始めたのが真砂さんだったんですね。

真砂 24・25年前、仲間と6人で始めました。ビーチにお店を出す権利を手に入れて、パリもこうだったな、と竹で椅子を作ったりしたんですよ。

大家 その6人は、共通のイメージがあったんですか？

真砂 いや、それはカリフォルニア(笑)。あるいはカリフォルニアだし、音楽をかけるカセットも取り合いになったりして、それがだんだんレゲエになってい

くんですけどね。それまでのカルチャーに飽き足らなかった人たちのたまり場になった。

真砂さんがパリに魅されたのは20代半ばのことだ。大資本による開発が始まる前の79年暮れ、「80年代の日の出を見よう」と、妻と当時4か月の子どもを連れて出かけ、3か月滞在した。

朝、田んぼに出かけて稲作をする普通の農民が、夜はガムランで音楽を奏でる伝統的でシンブルな暮らしに触れ、大きな衝撃を受けた。

真砂 パリでは、赤ん坊を聖な

るものとしてみんなが抱きたがる。かならず誰かが抱いてくれるんです。日本に帰って電車に乗ると、泣き声でみんな顔を背けるでしょ。妻と赤ん坊が一緒だったから見えてくるものがあるんです。で、日本に帰ってきて、葉山に住みました。都会と田舎の両方がある、人と自然が折り合って暮らしている。

葉山はパリに何となく似てるんですよ。

大家 カエルの鳴く田んぼがあるところもよく似ています。真砂 5年前から、田んぼを借

るところもよく似ています。真砂 5年前から、田んぼを借



五反田正宏  
text by Masaru Okamura  
瀬戸山玄  
photographs by Fukutsu Sotomura

東京にほど近く、名士の保養地として開けた神奈川県葉山町。陽光に輝く海とライステラス(稲田)にパリもこうだったな、とふと感じる。(真砂さん)。



「もちろん農薬や化成肥料など使わない自然農法。飯に運りかかってきた土地を人間の手に取り返した。今年も不耕農法にするつもりで、水を流しているところ」(真砂さん)。

りて米作りも始めました。20年くらい放ってあった場所なので、雑木林に戻りかかっていた。海の家で知り合った若い人にも手伝ってもらって耕したんです。大家とのくらい構えるんですか。

**真砂** 去年は90kgほど。自分のうちで食べる分だけなら十分です。米がすこいは、そのため働いたのが約3週間なんです。手をかけなくてもよく育つ。つまり主食はそれだけ働けば手に入ります。縄文時代から、そうやって日本人は暮らしてきたんです。今、若い人で米作りしてみたいという人は多いし、外国人はものすごく興味を示します。田んぼって、生態系を維持しながら人も集めるすこい資源なんです。

大家 バリで見つけたライフスタイルは、葉山で実現しようですね。バリみたいな洒落た海の家も、新しいカルチャー・ムーブメントとして根付いてますし。**真砂** バンブーハウスですよ。もう、5〜6軒くらいあるかな。移植に成功したんですよ。その竹も田んぼの脇の竹藪から切り出したもので、葉山の中で成り立っているんです。

80年代からは、民族楽器を演奏して音楽活動を始め、各地の

第一人者とのセッションなどから交流を続ける。92年、アメリカ南西部でネイティブ・アメリカン、インディアに触れたことを契機に、インディアンフルートを演奏。プロデュースしたCDや自ら創作する音楽が注目を集めている。

**真砂** ネイティブ・アメリカンには、精霊が笛を吹いて植物が生まれたという神話があり、シャーマンは自分の見てきた心象風景を現実と落とし込むため儀式をする。演劇やコンサートはそれに近いと思うんですけどね。そんな神話に生活が重なり合った生活を、近年まで続けていたんです。インディアンフルートの音色に「風景が見える」というお客さんが多いのですが、日本人にとって1000年以上前の自然や神話と重なっていた時代の記憶を呼び起こすんです。大家 日本も太古の記憶が消えたわけじゃなくて、覆い隠されているんですよ。

**真砂** だから覆い被さったものが崩れるとき、シャーマニズム的なものが見えてくる。僕は築80年の家を借りているんだけど、改装すると昔の住人の歴史が見えてくる。載ってなかった田んぼを復興しようというのを考えて掘ると、同じ場所に土管の跡が

出たりするんです。大家 文化のルーツとかアイデンティティは直線的に探しても見つからないけれど、ふと気がつくところにあたります。

**真砂** 自分自身の覚醒が始まるとアイデンティティを探すんです。世界中の民族楽器がこれだけ演奏されている、それを聴くオーディエンスのいる国って、日本以外どこにもない。つまり何でも盛り込む器のようなアイデンティティが日本にはある。行き詰まっているようにいて、激変する準備はできていると思う。そう思つてわくわくしてるんですかね。①



インディアンフルートを奏でる真砂さん。ゆつたと素朴な音色に風を感じ、風景を感じる本誌編集長・大家。